第 10 回　全国学校飼育動物研究大会開催報告

以下のごとく第 10 回の全国大会が終了しましたので、ご報告いたします。

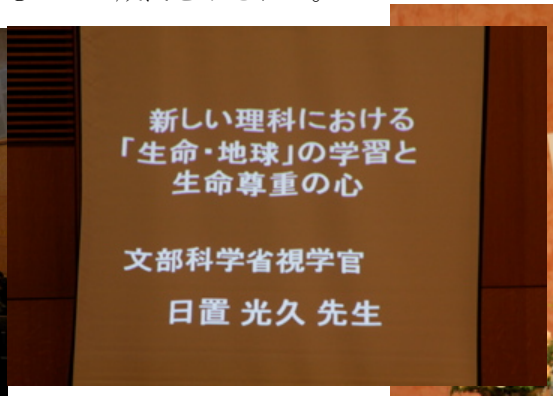
日時・平成 21 年 2 月 1 日（日）午前 10 時半から 5 時
会場・東京都　東京大学弥生講堂一条ホール
テーマ・継続して飼育活動に関わることの教育的効果と課題
参加者・310 名（教育関係者、獣医師会員、保護者、マスコミ　他）
開会・来賓挨拶
　社団法人日本獣医師会副会長　中川秀樹様
　文部科学省初等中等教育局教育課程課　菊地史晃様
　東京都教育委員会指導部　義務教育特別支援教育指導課和田栄治様
　ご紹介　社団法人　東京都獣医師会会長　村中志朗様
　　文京区教育委員会指導室　杉渕 尚様

来賓の方々は新学習指導要領及びその解説書に、継続する動物飼育体験と獣医師の支援の必要性が鮮明に明記されたことに言及して参加者を勇気づけられた。

参加者は、関東地区はじめ北海道、青森県、石川県、愛知県、広島県、奈良県、佐賀県など、全国各地からの 310 名で、内訳は、文部科学省関係者をはじめ、教師、教育大学生や教育委員会など教育関係者が 181 名、獣医師会、開業獣医師、学生など獣医師関係者 87 名、市議会議員やマスコミ、一般が 42 名であった。なお教育委員会の方は、東京都と都内市区をはじめ、京都市やさいたま市、久喜市、明石市、石川県内灘町など遠方から多数参加された。大阪府や三重県の市会議員や報道関係者の参加もあり心強く感じられた。

§講演：日置光久視学官「新しい理科における「生命・地球」の学習と生命尊重の心」

個人的な野生動物との体験を紹介しながら、新学習指導要領理科の内容構成の新区分「生命・地球」にこめた想い（このような対象に子どもが自主的・計画的に全感覚を通じて働きかけ、感動して追究していくなど、それらとの関わりなどの見方を構成することができる）を示された。また「体験の三角形」（土台（直接体験）、中層（メディア体験）、高層（言語体験，抽象化）を示し、土台となる直接体験にたっぷり時間をかけて活動を行い，ゆたかな感情の動きを大切にすること，また，そのような直接体験を重視しつつ，メディア体験を経由し，言語による整理，考察
を行うことの重要性を指摘した。さらに、自身が関わっている動物飼育作文コンクールの受賞作品を抜粋して、継続する飼育活動による子どもの心の成長を示された。



§口頭発表

① **佐々昌樹 まこと幼稚園園長**が、中野区の都会の幼稚園として、子どもたちに基本的な体を使ってのゆたかな体験を与えるために、園庭を工夫して飼育と栽培活動を取り入れている様子を紹介した。特にウサギやアヒルとの交流について子どもたちがそれぞれのやり方で親しむ様子を紹介し、子どもたちに諍いがあっても、動物が仲介し優しくなると話した。

②（社）青森県獣医師会の八戸市の会員が、**学校獣医師制度を取り入れて 8 年が経過した八戸市**での動物飼育ネットワークを紹介した。この 8 年で、学校の飼育方法については、かなり改善してきて、子どもへの良い影響も見られているが、飼育舎の改善や飼育活動への取り組みへの校長先生の

理解は今でも不十分なところが見られることを報告し、獣医師会は校長会や教員研修などを働きかけながら、見守るように支援を続け、またこの支援ネットワークを青森県のほかの地域にも積極的に紹介していきたいと述べた。

③ **さいたま市教育委員会から「動物介在教育実践小校」の指定をうけた馬宮西小学校**の校長、副校長先生と研究主任が、飼育委員会に全学年を関わらせ、その体験を一年から6年までの生活科、道徳、理科の授業に活用している様子と、子どもたちの成長や変化を報告した。特に生物が関わる学習内容への、子どもたちの学習への意欲、動機付けにこの体験が作用し、より深い探究心ややさしさを引き出していると報告した。これからも課題解決を探りながら生命尊重や思いやりの心を育む教育活動を展開したいと述べた。

④高崎市立東小学校の羽田校長が、特色ある教育活動に、「豊かで温かい人間性に育成～命を大切にしている活動を通して～」との目的を定め「学校全体での教室内飼育」の実践を発表した。ウサギの飼育に関しては群馬県獣医師会が支援し、動物の導入から世話の仕方、接し方等の飼育管理指導や季節対策を含めたきめ細かい訪問指導を行った。休日はホームステイさせ、親子のよい体験活動となり更に、地域かはら子どもが使える飼育ケージの移動車を寄付されるなど、地域に溶け込んだ活動の手段にもなった。成果として、協力、共存、生物理解が見られ、感性の素地を磨くための効果的な取り組みになった。また、**学校全体での飼育を始めたところ、学校全体がしっとりと落ち着いた優しい雰囲気になった**と報告した。

⑤羽田校長の**小学校を支援した社）群馬県獣医師会の学校動物愛護指導委員会**が「教室内動物飼育が子どもに与える教育的効果」について、群馬大学発達心理学教室と共同で調査を実施し、小学校１年生と5年生における統計処理の結果を阿部氏が中間発表した。その結果、**１年生における向社会性行動及び5年生における共感性おいて有意な得点の上昇が見ら**れ、教室内での動物飼育経験による効果が推察され、毎日身近で触れ合うことが動物飼育による効果をもたらす上で重要な要素である検証された。学校での動物飼育においても教室内飼育がよりよい効果を得られると思われる結果であった、これらを踏まえて追試等を実施中であると述べた。

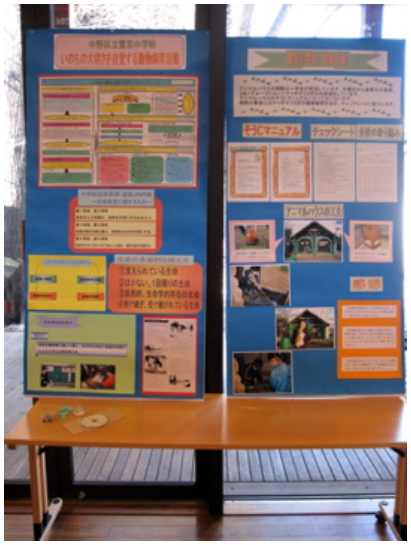
⑥**聖徳大学理科研究室の教員希望の学生**たちが、小学1、２年と5年生、大学生を対象に、飼育体験の差による「チャボとアヒルへの観察力の変化」を比較したところ、飼育体験のある子のほうが観察力があり、また 1 年などの低学年には教師による観点を教える言葉かけがあるほうが、観察力が向上することが示唆され、理科分野でも動物への観察力には、飼育活動が重要と報告した。なお生育場所（東京対東京以外）による差はないことも報告した。

⑦**奈良市の保護司で動物病院長**の三本獣医師が、3つの小学校の**特別支援学級での「モルモットを飼育して子どもの変化を見る」実践を**報告した。これは、教育大学障害児教育学教室と、心理福祉学部心理学科学生、スクールカウンセラーの臨床心理士、スクールサポーターそして獣医師がチームを組んで行われた。目的は、日内リズムの確立や動物に対する親近感の獲得および生命の実感、動物とのコミュニケーションを通じて、自尊感情を高めることにあった。ふれ合い指導と活動を繰り返すことにより、ダウン症、自閉症圏、ADHD と診断されている子達にそれぞれに応じた変化が見られ、飼育活動の有用性が認められた。また、教師は飼育体験により「動物はこわい」とのイメージが変わった、学級に活気がでた、劇的に変化を見せた児童がいたなど報告したが、保護者からも、親子の共通の話題になったとか、家庭が明るくなったなどの良い効果が報告されていた。

§パネル発表

① **東広島市立黒瀬小学校**が、飼育されているモルモットと子どもたちの様子を描いた子どもたちのダイナミックな絵のうち４枚を展示し、豊かな感性を感じさせた。

② **（社）東京都獣医師会の杉並支支部**が、区と動物飼育支援協定を結んだことについて、その経過説明、新聞記事、「杉並区立学校における動物飼育支援活動に関する協定書」などを掲示した。また都内自治体の連携状況や東京都獣医師会が都教委との連携で全公立小学校に配布した「飼育に関わるお知らせ･冬の対応（命には休みがない)」などを示した。



③ **千代田区立お茶の水幼稚園**が、長年飼育している２羽のウサギと２匹のカメが２１名の子どもたちから愛情ある世話を受けている状況、様子、子どもの柔らかく生き生きとした表情などを写真で紹介した。

④ **中野区立鷺宮小学校が、**文部科学省の「いのちの大切さを自覚し、よりよく生きようとする児童の育成」の道徳研究指定校として、第４学年に固定してウサギ２羽とチャボ５羽の飼育活動を行っていることを示した。都会の子供たちにとって、動物の生態やぬくもりを感じることは、いのち認識する上で大きな価値があり、心の成長を図る契機ともなっているが、その飼育活動の教育理論と目的と成果ならびに、実際の飼育の方法と獣医師の支援について紹介した。

終了後　８０名ほどが、日置先生はじめ各地の教育委員会の方や、教師、それを支える獣医師、マスコミ等が会場にのこり、なごやかに１時間半ほど交流して散会した。

宮下英雄会長

無藤隆顧問

中川美穂子事務局長